

あとがき

本書は、『清末小説研究ガイド2005』（2004）の改訂版である。

今回、変更した箇所などについて説明しておく。

構成には、変化はない。

「第1部」は、研究論文についてのべる。論旨は、前回と同じだ。ひとことといえば論文には「新しい発見」が必要だということのみ。その主旨を維持しながら、今回は全面的に書きあらためた。いくつかの新資料を発掘するにいたった経緯について、やや詳しく記した。具体的な例をあげて説明するほうが参考になると思ったからだ。

私が行なっている問題追究の方法を説明するだけではない。同時に、中国における研究について考えることになった。いままで、なにかしら、どこかがおかしいと違和感をいだいた事柄がいくつかある。研究の途中で出会ったそれらについて、背後になにがあるのかをさぐった。書いていて自分のなかで徐々に像をむすんだ。その結果は、あまりうれしくはなかった。「序説」にかえて「蟻の穴から」と題する。

それらをあわせて前作と重複するところがあるが、ご了承いただきたい。

「第2部ガイド」に収録する文献は、2005年版では999件だった。本書では283件を追加する。全1,282件となる（重複を含む）。

前作「附録ガイド作成履歴」は、削除した。こういう種類のものは、一度公表すれば十分だろう。そのかわり清末小説研究会ホームページにかかげた。興味のある人はそこで読むことができる。

「本ガイドの索引」は、作家索引と文献索引だ。今回は、収録文献の編著者索引を追加した。

2005年版を見た人から、これを全部読まなくては論文を書いてはいけないのか、と質問された。なにか勘違いをしているらしい。

本書は、あくまでも「ガイドブック」である。課題を解決するために、あるいは

目標とさだめたものを探索するためには道具が必要だろう。その道具を紹介しているにすぎない。

型録に掲載された道具のすべてを集める人は、たぶんいない。しかも、すでに失われたものもある。過去の記録をかねているからだ。自分にとって必要かどうかは、その人の目的による。当たり前のことだ。

工具は自分が手にとって試さなくてはならない。自分にあっているかどうかは、使ってみてからの話になる。ぴったりの道具があったとして十分に準備をしておくことが重要だ。

他人とは別の場所を掘り返して新しいなにかが出てくるかもしれない。使い慣れるほどに体験を積み、そこどころがっているかたまりが他人にはただの石にしか見えなくても、自分には宝石だとわかるばあいが出てくる。あるいは、小さな穴をいくつもあけてみると、地面全体が陥没するという事態がおこらないとも限らない。あれほど多数の研究者が、揺るがぬ大地の上で踊れや歌えと大いに論じていた。ところがその大地は偽装したものだ。わかってしまえば興ざめか。しかし、知ることがおもしろい。

2005年版の販売実数（贈呈分を除く）は、53部であった。この数字を見ると、清末小説研究という分野には、まだ発見する機会が豊富にあるということがよくわかる。

経済的に見合わない事業（つまり、資料叢書ほかの刊行）をなぜやるのか。こう問う人がいるかもしれない。

この社会が損得勘定だけで動いていると考えるのは間違いである、と答える。

小説研究は、もともと経済的見返りを求めてのものではない。ほかの分野は知らないが、少なくとも清末小説研究ではそうだ。すでに体験済みである。どうしても知りたいことをひとりで追究している。

学術上、残す必要があるものについては、経済的損失を度外視するのがよらしい。得られる精神的満足は、金銭の支出を大きくうわまわるからだ。

樽本照雄